

ミニ展示「射界清掃 ―発掘出土品が語る熊本城下焼亡―」



実際の展示風景

明治10年（1877）2月19日、西南戦争開戦当日。

熊本鎮台は城下に火を放ち、市中は焦土と化した。

前日、大砲を撃ち、市民の立ち退きを命じたうえでの措置であった。

「障礙ノ家屋ヲ毀チ以テ展望ヲ便ニス」『熊本鎮台戦闘日記』

城下の民家が薩摩軍の隠れ家・陣地となることを防ぎ、進出してくる薩摩軍への攻撃機能を高める・・・熊本鎮台が籠城戦に際してとった戦略「射界清掃」である。

この時、城下市中はパニックに陥った。

「それ逃げよとかけ出し見れば・・・十方ぐれんの闇となり、気も狂乱し、振り返り見れば眼飛び出して来る者有り・・・」『肥の国軍物語』

令和元年度、熊本市は焼失した城下町跡の一角で発掘調査を実施した。

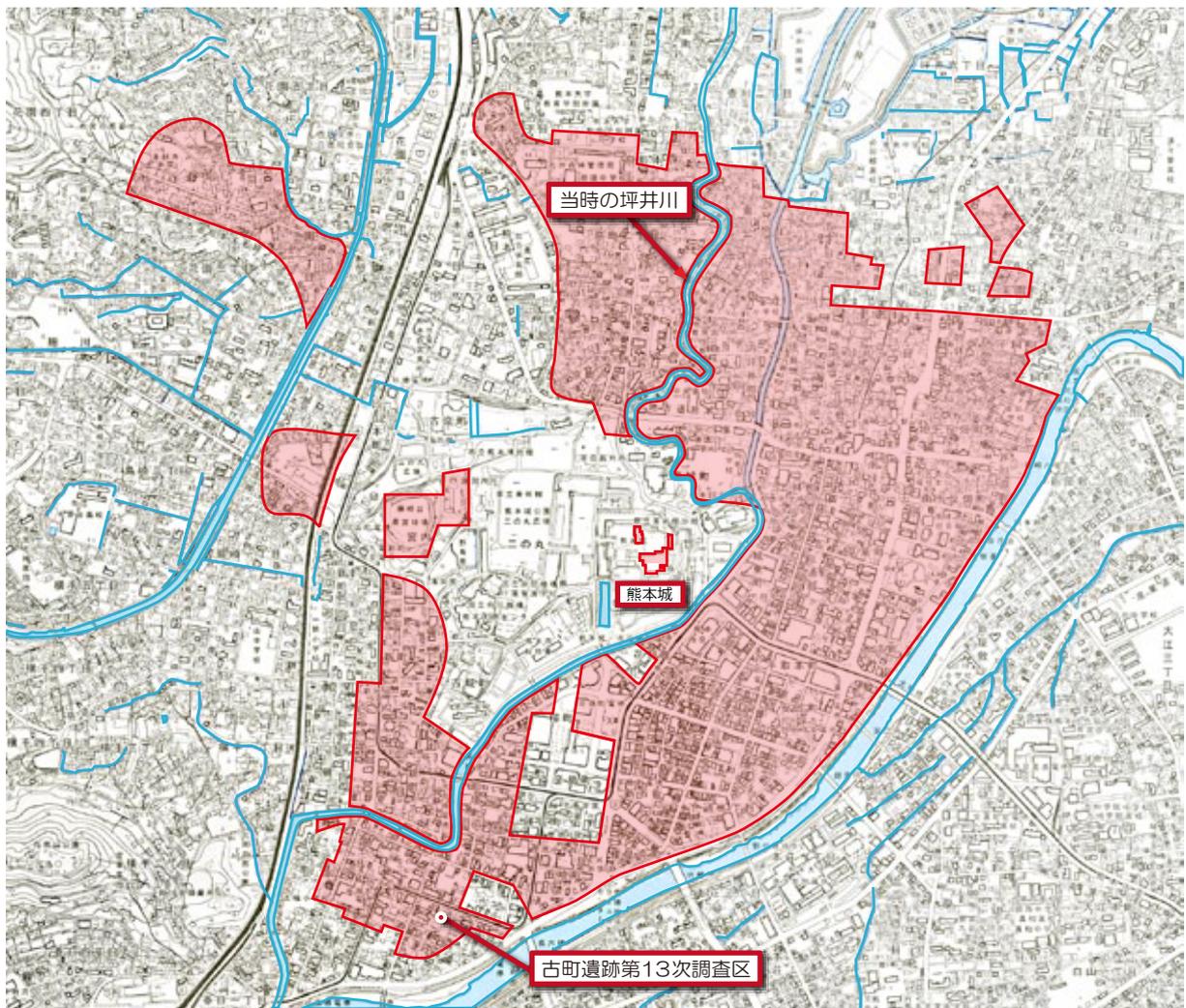
古町遺跡第13次発掘調査である。

焼失時に形成された焼土層が検出され、そのなかから大量の生活用具・建築部材が出土した。

本展示は、出土品の一部を紹介する。

城下が確かに焼失したことを証明し、火災の凄まじさを示すとともに、明治10年2月19日時点における、市中の暮らしぶりを伺わせる資料である。

熊本城下の焼失範囲

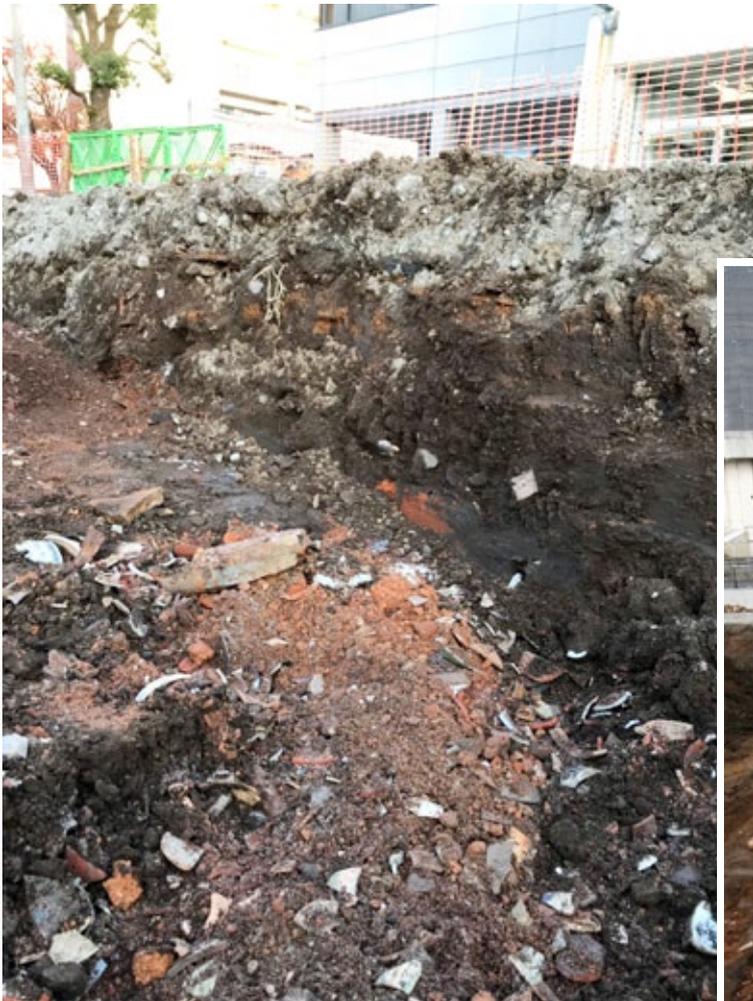


▲熊本城下の焼失図 ※「熊本焼場方角図」(明治10年5月)をもとに作成

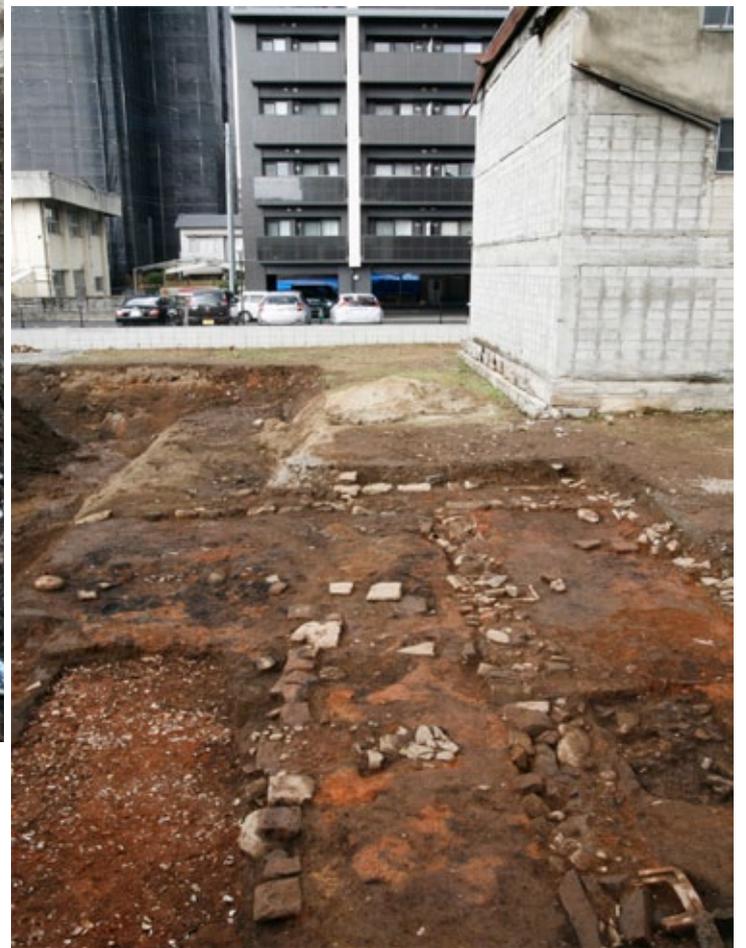
発掘調査の状況



▲発掘調査区の土層断面



▲ 焼土層中における生活用具の出土状態



▶ 当時の建物跡(焼土層を除去した状態)



▲ 焼失直後に掘り込んで陶磁器類を捨てた穴

焼土層からの出土品

生活の多様化をうかがわせる様々な陶磁器類



◀ 碗・皿

皿の呉須は、明治時代になって導入された化学コバルトを使用。

▶ 徳利



◀ 土瓶（身・蓋）

江戸時代後期になると喫茶や酒の爛つけとして土瓶が普及する。



◀手鍋蓋と小形の播鉢
江戸時代後期になると、個食用の調理
具として、焜炉とセットで手鍋が普及
する。



▶仏具
左から仏飯・香炉・花瓶



◀灯火具
内側に油を注いで、芯に灯りをともした。



▶ままごと道具
軟質のミニチュア陶器で生活道具を模
している。

火災による被熱の影響が著しい陶磁器類



▲土瓶。釉が白濁する。



▲碗。釉が変色し、発泡する。



▲小物蓋。釉の光沢感がうすれ、部分的に変色する。



▲ほうろく。焼土が付着する。



▲手鍋蓋。壁土が付着する。



▲土瓶蓋。熔融した鉄分が付着する。

火災による被熱の影響が著しい瓦・壁土

- ▶ 壁土
荒土壁と漆喰壁
(右下)。
荒土壁には、下地
の割竹の形が写っ
ている。



◀ 変色した瓦片

- ▶ 変色した瓦片 (九曜紋軒瓦)
廃藩置県により管理されなくなった城内建物の瓦
が、城下の民家に葺かれた。

